子どもに伝えて（2）

Caring と Sharing

松本　康子

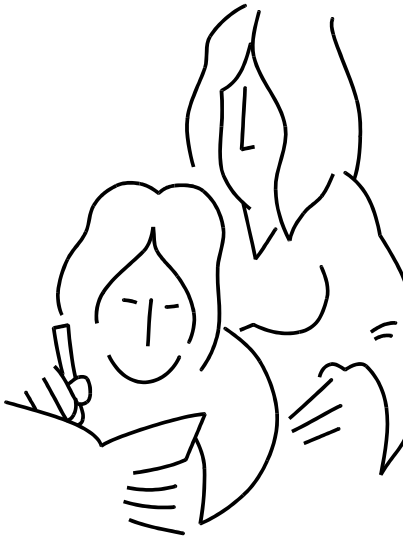
次女に、「お母さんは、親として何か子どもに伝えたいと思って子育てしてる？」と聞かれました。
「はい、それはいろいろありますよ。」

人が誰かと関わりながら生きていくのは、とても大切なことです。人と接することでいろいろな考え方を学び、それが自分自身の成長の手助けとなるからです。その中でも、人に対する気遣いと、ヘルプと問われれば手を差し伸べる事を学ぶのは、とても大切な事だと、子ども達を教育してきました。

＜ Caring と Sharing ＞

子どもの幼稚園で、ある英語の言葉をよく耳にしました。日本ではあまり聞いた事がない言葉で、「Caring」と「Sharing」です。

物の道理を理解しているかどうか怪しい幼児を相手に、先生やお手伝いのお母さん達が、子どもの遊びの中でよくこの言葉を使っていました。要は、遊びの順番を待ったり、好きなおもちゃで遊びたい時に起こるトラブルを、この言葉で回避しているようでした。



大人は、遊びの中にルールがある事、グループで遊ぶ時にはそのルールが優先される事を教えながら、皆が納得いく方法で遊びましょうと言いたいらしい。家庭でもよく使われるのでしょう。不思議なことに、幼児たちはこの言葉を条件反射のように受け入れてしまいます。日本語で言えば「他人への気遣い」や「分け合う」気持ちを、刷り込み教育されているのです。

渡米当初のこの印象のせいか、後にいろいろな視点でアメリカのカルチャーを見る事が出来ました。

＜共存＞

中古車がどういう物かも知らずに買って、道路の真ん中でエンストする羽目に遭った事があります。交通の邪魔にならないよう道路脇へ車を寄せたかったのですが、夫婦だけでは難儀をしていました。すると、２台の車がすっと止まり、それぞれの車から男性が降りてきて、”Do you need my hands?” と声をかけてくれました。この申し出をありがたく頂戴して、あっという間に片づきました。

車社会のアメリカで、自分自身が車に関していろいろな種類のトラブルに遭うたび、いつも誰かが手を貸してくれたり、また、他人が受けたりしているのを度々目にしてきました。車だけではなく、大型台風で被害を受ける地元民に対して、公的な支援はもちろん、個人レベルでの救援活動の様子をテレビで放映されます。よく聞いてみるとその中には、遠い州から仕事を休んで駆けつけたという人がいました。私では決して出来そうにない事を、この人はどうしてやれるのか、と考えさせられました。

その後、現地校で ESL を担当する先生を集めた講習会に出席し、配布されたテキストの中にあった詩の一節を読んで、「Caring」や「Sharing」と同じ意味を持ったカルチャーを知りました。それは、生徒が「共存」とは何なのかを理解させるのに、一つの例として紹介されていました。その詩を要約すれば、「あなたが受けた厚意に対して、自分も何かの形で相手に返したいと思いながら、それがその場で出来なくても嘆く必要はありません。あなたが出来る時に、出来る事を、出来る力量で、必要としている人へ返していけばいいのです。」と詠っていました。「目からうろこ」でした。

幼児の頃から聴いた言葉は、実際に行動する事で意味を持ちます。私たちが困っているの見て、躊躇なく手を貸してくれたり、仕事を休んでまで救援活動したりする事が、なんとなく理解できました。